

川村晃司講先生は、

偶然に見える幸運を、実は自ら選び取っておられたように思えました

今崎牧生

戦場で記者をされておられる方のお話を直に聞いたのは、これまではじめてで、おそらくこれからもない貴重な機会でした。ご自身のご病気のお話と、記者としての経験のお話が、不思議に織りなっていたのが印象的でした。まるで用意されたかのように。

「偶然は準備の出来ない人を助けない」(パスツール)という言葉が残されています。戦場で、超一流の記者であるという事は、ほんの一瞬の判断の狂いも許さない状態を保ち続ける事なのだとは強く感じさせられました。

「PKDの症状でいつ動けなくなるかわからないので、動けるうちに動く」

「病気のおかげ」

とおっしゃっておられましたが、とても常人には出来ないことであり、その集中力の持続が一見、偶然に見える幸運を実は自ら選び取っておられたように思えました。

私は今、電動車いすに乗るような身体ですが、心療内科医で、受傷するまではERや循環器科などもやっておりました。日本で初の生体肝移植が行われた時、ちょうど私はその島根医科大学で最終学年の研修をしていました。とても残念な結果となりましたが、その影響が強かったためか、同級生で阪大医学部の消化器外科に入局したものが多く、今は成功例が多い生体肝移植をやっています。

その後脳死の診断基準が厳密に定められ、平成7年から腎臓移植が、移植法が改正された平成10年より、ドナーの数が充分ではないにせよ増え、心臓や肝臓など幾つかの臓器の移植が、成人では行われるようになりましたが、症例が少なく研修が国内では足りない、移植コーディネーターがいないなどの課題が残ったままです。

法改正で15歳以下の子供でも家族の同意でドナーとなることが出来るようになった2011年、震災からひと月後の4月、いったい何が起きているのか、情報に耳を立てていたときでした。はじめて10代前半の男の子がドナーとなり、心筋症の10代の子供のレシピエントに移植が行われたとのニュースが飛び込んできました。子供の心臓疾患は手術をしないと亡くなるのを待つだけというケースも多く、また私が研修していた時代、成功率は疾患にもよりますが、決して高いとは言えず、手術室で亡くなる小さな命を見ざるを得ませんでした。現在の移植技術をもってすれば助かる命です。

一例目の後、子供のドナーが家族の承認のもとで現れますが、家族の思いとは別の周囲からの軋轢や思惑により結局断念したとの報道に触れました。結局、昨年までのデータでは二

桁に満たないというのが日本の子供の移植の現状です。多くの子供たちが海外でドナーを待ち、それ以上に多くの子供たちが主に資金の問題で移植を受けることが出来ず亡くなっています。

死が日常的な医者という職務のため、「死」というものに対する捉え方はマジョリティーとずれているかもしれません。

移植については基本的に推進するべきとの立場に立っています。

法改正が行われて以後の15歳以下のドナーの少なさは、医療機関側の問題もあるでしょう。また、宗教や慣習など日本の風土に根差したものが影響していることは間違いはないでしょうが、本当の原因はそこではないと思っています。

現に昔は数が少なく、どこの医学部でも困っていた、ご献体が今は多すぎて困っていると聞きます。息を引き取られた身体を、いわゆる「肉体」として捉え、魂の宿る身体とは別と考え、医学の進歩のためにと思われる方たちが増えたお陰でしょうか。

一方で、哲学者の鷲田の指摘を待つまでもなく、日本の戦後のある時期から死が日常から隠され、遠ざかり、病院に任せの状況が1世代くらい続いたと思います。

その間に日本全体として死に対する観念や感覚が薄っぺらになってしまったように思えてなりません。

そこに科学的な知見に基づいた「脳死」という基準が突然現れて、皆どうしていいかわからない、というのが実情ではないでしょうか。

子供の場合、意思表示が難しく家族が決めるわけですが、親戚であるとか周囲の人々、場合によってはマスコミまで含め、何か言われかねない。

個人的見解ですが、その時の躊躇が子供のドナーが増えない一番大きな原因ではないかと推測しています。

特にインターネット時代の今、子供のドナー提供の事例を調べるとすぐに、「虐待があったのでは」などと心ない文字が飛び込んできます。マスコミも何かを恐れるように正面から向き合うことが少ないように思います。メディアの話は釈迦に説法なので感想に留めます。日本は乳幼児死亡率が世界一低い優秀な医療体制を作った国です。ただ残念なことに子供の移植ということに関しては低次元の社会的制圧が命をつなぐリレーを阻害しているように思えてならないのです。

勿論、移植は医療技術の一つに過ぎず、論ずべきは、技術を偏重するのではなく、如何にその技術を使うか、社会としてその技術を正しく活かす努力を積み重ねることであり、すでに、社会全体で取り組む時期にいるのではないかと改めて気付かせて頂きました。

今回、ご自身や他者の命に紙一重で向かい合っただけで来られたからこそ、とても含蓄のあるお話を聞かせて頂き、大変感謝しております。